



寄木のトレイ。楓・桂・桑・パーブ
ルウッド・柿・桜・きはだ・檜。パー
ブルウッド以外は奥多摩の材。

6

木工芸と漆
小山勲さん

色とりどりの板でできた寄木トレイ。パンやマグを乗せ、日なたでランチの常連ものです。

小山さんの作品は、奥多摩の木材を利用しています。奥多摩氷川町の工房と、小平の木工芸教室NiReを往復する暮らしです。

木工を始めたのは40歳から。「轆轤は東向島の職人さんのもとの、半ば押しかけ状態で教えてもらいに行きました。最初はけむたがられたけど、かかさず顔を出すと次第に教えてくれるようになって…会得したのち、輪島塗りも学びました。」病気を機に54歳で最初に前職をリタイア、家具技術を専門学校で学びその間、自宅をまずは工房に。奥多摩に工房を構えるようになったのは、林業に携わる知人からの紹介でした。「奥多摩の木材を手に入れ寝かせてある。だから注文にも即対応でき、安くあげられる。生徒さんにも好評です。」人にやさしい、相手の立場にたったものづくりがテーマ。注文家具製作の傍ら、最近創作したのは、なんだろろうボックス。手の中に入れて、ひらがな等が刻まれたブロックを、指の感覚を頼りに当ててゆく。知育やリハビリに活かせるとして、商品化される話も。「デザインは独学。ものまねから入って良いんです。作品展などに出かけ、いろいろな情報をインプットしておく。それは何らかの形で自分の創作に生きるんです。」



自作の轆轤。時計会社の技術屋だったので改造改良はお手のもの。



なんだろろうボックス。駒は桂、箱は杉材。小山さんの技は多岐にわたる。「客や生徒さんから無理な注文を最大限聞いているうちにね。教室は賑やかでできるんな発想が出てきます。」

奥多摩の工房はまるで木の資料室のようです。「スペースを借りて行う、ワンデースクールを構想中です。」



宮大工の秦さんは奥多摩の山の上に作業場を構えています。何故ここを選んだのでしょうか?「木にはある程度湿度が必要なんです。ここは山背負って日も当たらないから、木がバーンと割れることもないなって。」夏は涼しくてとても快適だそうです、冬は沢風が寒くて寒くて大変!と笑いながら話してくださいました。

秦さんが宮大工になったのは23歳。当時、工務店で大工となっていた秦さんは、住宅建築に物足りなさを感じていたと言います。そんな時、偶然前を通りかかったお寺が改修されており、早速お寺の住職に問い合わせ、社寺建築専門の工務店に入ることに。こうして宮大工としての下積み時代が



始まるのですが、最初は鉋を一日中いじくり回して終わったこともあるといいます。親方は何も教えてくれないので、作業場の作業を見ることはもちろん、本を読んだり、小さな模型を作ったりして技術を習得していったそうです。そうして5年経った頃、親方の仕事は自分でならなければわからないと思いい、フリーになり、その2年後、独立。知人の紹介で奥多摩のこの地に作業場を構えました。「これからは直で仕事を取っていきたい。請ける仕事も社寺にこだわらず、この技術を活かした民家も建てていきたい。」と言います。「今は使っていませんが、その時は奥多摩の木もうまく使っていきたいですね。」是非是非、立派な家を建てていって下さい。



宮大工
秦義史さん

上/3、40人の中で1人ものなればいい、という厳しい宮大工の世界。そんな厳しい下積み時代も、笑顔でさらりと語ってくれました。左/進行中の現場は千葉県幕張の善勝寺。左はその仕事の合間に作ったもの。社寺に使う材木は檜・樺・檜葉で、その都産産地を指名して注文するそう。檜は尾州檜が一番!刃物を入れた時の刃切れが違うそうです。下/秦さん所有の鑿の一部。道具にももちろんこだわりがあり、「刃物をろくに研げないヤツには売らない!」という下町の刃物屋のご主人の目の前で刃物を研いで見せ、その腕を認められたエピソードは嘘のようなホントの話。ご主人秘蔵の刃物も譲ってくれるようになったとか。お見事!

